

続文化は、  
今に生きる

いていても、自分の食性以外の葉には見向きもしない。違う葉っぱをそばに置いていても餓死してしまう。頑ななまでに自らの食べるべきものを限定しているのである。」という。

蚕桑績績  
と、「魏志倭人伝」は、記載する。昆虫少年少女ならよくご存知のように、昆虫は食べ物がきまっている。たとえばモンシロチョウの幼虫はアブラナ科の葉、モンキ

糸にする繭玉は、山繭蛾か蚕蛾。釣り糸にする薄緑の天蚕糸は山繭蛾ので、幼虫は樺の葉を食べる。対して、白い絹糸を吐く蚕蛾は、桑の葉を食べる。だから、「蚕桑」の組合せから、こ

蚕のこゝと

深澤芳樹

チョウはメメ科。アゲハチョウはミカン科が多く、モンキアゲハはユス、ナミアゲハはスダチなど。

の蚕はみかけは白いが、じつは透明な絹糸を吐く蚕蛾になる。蚕蛾の幼虫は、繭玉のなかで蛹になり、羽化する。その繭玉は、体内の絹糸腺で作ったタンパク質フィブロイン繊維を、接着物質セリシンでコーティングして、これを吐糸口から吐く。そして完成するまで吐きつづける。糸の長さは、一皿におよぶ。しかもその太さは、吐きはじめから終わりまでほとんど変わらない。

生物学者福岡伸一さん『新版 動的平衡』小学館は、「植物はどんな葉でも基本的な光合成の仕組みは同一なので、そのため豊富なタンパク質や糖質を含んでみる。だから分析的な目でみると、栄養素組成としては大差がないはずである。しかし、蝶の幼虫たちはどんなにお腹が空

繭玉のなかの蛹は、羽化する

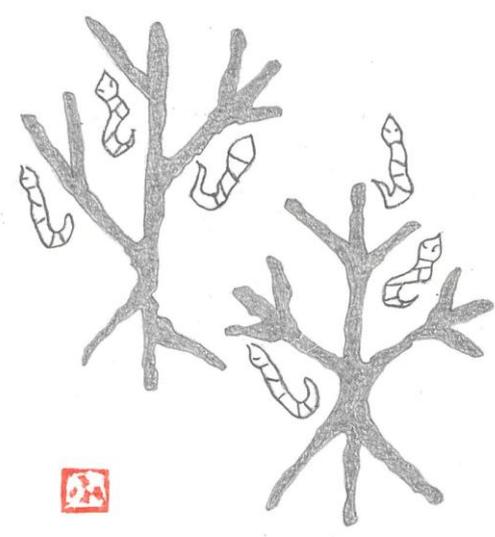
現在には探知機で即座に特定できらに、「績ほ、長い繊維をつなぐという意味で、短い羊毛などを糸にする「紡」とはちがうとも、教えてくれた。一九〇〇年前の

人はセリシンを溶かして、繭玉を糸にする。古来、糞灰を溶かした水溶液に繭玉をひたしてき

セリシンを落とすと練績で、シルキーになるが、繊維の強度や染色力が弱まる。落とさない

弱アルカリ性水溶液がセリシンを溶解する。だから繭玉がまだきれいなうちに、この水溶液に沈めて蛹を溺死させる。

染色家吉岡幸雄さんは、「絹糸はすばらしい。糸が白く見えるのは、透明だから。だから、に



甲骨文字「蚕」と「桑」(深澤芳樹写)

るのぼる里山が見つかって、そこに在来の桑(ヤマグワ)をたくさん生やして、その桑のまわりをまわる、弥生人の足跡がたくさん見つかった。おそらく、蚕にあげる葉を、夏につんだときの足跡なのだろう。おなじ里山には、茜などを染めるのにつかう媒染剤にする樺もたくさんあった。

夕焼の 蚕実帰る 女達  
飯田龍太  
(日本考古学)